

ヒトと野鳥との付き合い方を考える

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

少し前に知人から、検索サイトで「野鳥カメラマン」と入力すると、関連ワードとして「迷惑」が自動的に表示される、と教えていただきました。実際に試したところ、「迷惑」と併せて「怖い」、「マナー」も表示され、ヒット件数は約559,000件でした。次いで「バードウォッチャー」と検索したところ、関連ワードは「英語」、「バイト」、「人口」(上位3個)と表示され、ヒット件数は約475,000件でした。

確かに、近年はバードウォッチングに出かけると、大きなレンズを付けたカメラを掲げた方々を多く見かけます。私自身、野鳥を観察し始めてから30年以上が経ち、いろいろな観察ポイントに出かけていますが、撮影を主目的としたヒト(以下、カメラマンと称す)が目立ち始めたのはここ10年ほどの間だと思います。高性能デジタルカメラの普及と定年を迎えた団塊の世代が増えたことが大きく影響しているのでしょう。しかし、検索サイトで「迷惑」や「怖い」といったネガティブな言葉が自動で表示されるのは、どのような事情なのでしょう。

水場での出来事

自宅のある東丹沢の麓には、雑木林や池、湿地といった環境が見られ、手軽にバードウォッチングを楽しむことができます。いくつかある観察ポイントのうち

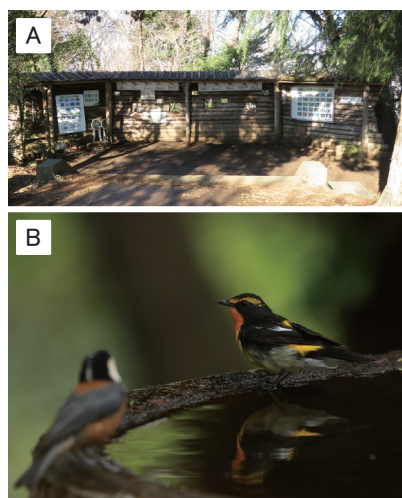


図1. A: 自然公園に作られた水場。観察するための木製の壁がある。2019年3月8日、加藤ゆき撮影。B: 水場に飛来したキビタキ(右)とヤマガラ。2017年5月7日、重永明生撮影。

1年を通して楽しめるのが、自然公園の中に作られた野鳥専用の水場です。水場の前には野鳥を驚かせないよう木製の壁があり、小さな窓から水浴びをする姿を観察できるようになっています(図1)。壁には地元の野鳥愛好団体による写真入りの解説看板もあり、ぶらりと出かけて野鳥を楽しむには最適な場所です。

ここは有名な観察ポイントらしく、県内だけではなく関東一円から来訪があります。中には車で2時間以上もかけて通っている人もいと聞きました。先日、この場所に立ち寄ったときのこと、ほぼ全ての小窓にはカメラやタオルなどが置かれ、場所取りが行われていました。ところが、それらの持ち主は少し離れたところに集まって話をしており、壁の前で野鳥を待っているのは一人しかいませんでした。カメラ越しに観察できないこともなかったのですが、密になるのは避けたかったため、壁の横から観察していました。少ししてキビタキのオスが飛来し、壁の前で待っていたヒトが撮影し始めた途端、これまで話に夢中だったヒトたちが“自分の小窓”に戻り、一斉にシャッターを切り始めたのです。おそらくシャッター音を聞いて“何か出た!”と気付いて駆けつけたのでしょう。

この光景を見て思ったのが、「マナー」です。実は、水場に到着してからキビタキが飛来するまでの間、何人ものハイカーが小窓から野鳥を見ようとやってきたのですが、カメラや小窓に置かれたタオル等を見て明らかに困惑した表情となり、帰っていったのです。場所取りをしていたヒト達はそれに気づいていたはずですが、機材をどかすといった対応はしていませんでした。撮影しているならまだしも、小窓を使っていないのであれば譲り合って観察すればよいのに、と感じた場面でした。

農耕地へ侵入するヒト

近年、希少な種の生息が確認された場所へ、大勢のバードウォッチャーやカメラマンが集中する傾向が顕著です。例えばSNS等で観察情報が紹介されると、翌日には何十人もがその場所へ集



図2. A: 農道から観察をするヒト。B: 観察・撮影のために畔や農道からナベヅルの幼鳥(○囲み)に近づくヒト。いずれも2017年1月2日、重永明生撮影。

まることも珍しくないようです。特にカメラマンが多く、彼らは対象種をより大きく撮りたい、見たいとの思いからか、野鳥に近寄っていくことが多いようです。しかし、彼らの熱意と反して、ことごとくふられている光景を見かけます。

2017年に神奈川県西部でナベヅルの幼鳥1羽が越冬した時には、連日のように多くのカメラマンが訪れていました(図2A)。同所で断続的に観察をしていたところ、徒歩で近付くヒトに対し、本個体は頭部を上げ警戒をした後、歩き去りまたは飛び去りといった回避行動を取り、最終的にはヒトが近寄ることのできない川の中州へと移動しました(加藤ほか、2017)。長野ほか(1992)の報告によると、ソル類の集団越冬地である鹿児島県出水地方で人や自動車の接近に対する本種の反応は、自動車よりもヒトに対してより強い警戒を示すとされています。そして、ヒトとの距離が50 m以上の場合は歩き去るだけですが、50 m未満の場合は歩き去りに加え、半数以上の個体が飛び立ちを行った、とあります。ところが、同地ではヒトとの距離が70 mほどで飛び立ちを確認しました。おそらく大勢が一斉に近付いたため、警戒距離(ヒトの接近を許す距離)が長くなったのだと推測されました。

ここで気になったのは、ヒトの農耕地



図3. A: 営巣木に止まって休むアオバズク。2018年6月24日, 加藤ゆき撮影。B: ヒトの接近に反応して目を開けたアオバズク。2021年6月6日, 加藤ゆき撮影。

への侵入です。ナベヅルは同地に3か月ほど滞在しましたが、途中で「耕作者以外進入禁止」と書かれた看板が各所に立てられました。この場所は田んぼが大部分を占めており、冬季は何もない空き地のように見えたのかもしれませんが。しかし、地権者にとって稲や野菜などを育てるための大切な農耕地ですし、畔を壊されると修復が大変です。無断で侵入されれば不愉快になるのは当然です。それにもかかわらず、看板の横をすり抜け、農耕地や畔に侵入するカメラマンも多く見られました。地権者にとって「迷惑」な行為です。

ナベヅルへの攪乱も深刻でした。本種の習性として農耕地で1日を過ごし、朝と夕方に採食を行い、日中は主に休息をする傾向があります。カメラマンから逃げ回っていた本個体は、採食や休息のための時間を農耕地で取ることができず、日によっては逃避場所の中州から出てこないこともありました。そして、カメラマンが帰った夕方になると、農耕地へと移動し地面に落ちた落花生や土の中のカエル類などを探し食べていました。筆者の観察によると、カメラマンがいる時の本個体の採食頻度は前述の出水地方の個体と比べて半分以下、逆に逃げるための飛翔頻度は10倍以上、という結果が出ました。3月中旬以降になると訪れるヒトは減り、本個体の採食行動は出水地方の個体とほぼ同じ頻度になりました。ヒトの影響を受けて行動様式が変わった可能性が高いと考えられました。カメラマンは良い写真を撮りたいとの思いから近づいたのですが、ナベヅルにとっては「迷惑」な行為だったのでしょう。

ヒトとの距離と警戒行動

鳥類には「人間＝危険」という基本的な認識があり、「危険な人間」と「危険ではない人間」とを見分け、「危険ではない人間」に対してはより接近を許すことが様々な研究から明らかとなっています。警戒距離は種や生息環境によって異なり、また同種であっても時期や個体による違いがあり、警戒行動も様々です。例えば、神社などの大木の樹洞で繁殖をするアオバズク。抱卵時やヒナがまだ飛べない時期は、営巣木やそのすぐ近くの枝に親鳥が止まっていて、巣穴やヒナを見守ります。本種は夜行性なので、昼間に営巣木に行けばほぼ確実に姿を観察でき、バードウォッチャーのみならずカメラマンにも人気の高い野鳥です。SNS等への写真掲載も多く、その大半がカメラ目線で、黄色い目がきれいに写っています。

夜行性の本種は、昼間は睡眠の時間帯です。それなのに、なぜ目を開けているのでしょうか？ ヒトが営巣木から遠く離れている時、本種は目を閉じて休み、時折目を開けて周りを警戒し、再び目を閉じて休むという行動を取ります(図3A)。ところが、ヒトが営巣木に近付くと黄色の大きな瞳を開いて、動きを追っていきます(図3B)。SNS等の写真の多くは日中に撮影されたものでした。そのため、目を開いている姿を撮りたい場合は離れたところで目を開けるまでじっと待つとか、営巣木に近付き警戒する姿を収めるかのいずれかの方法になります。後者だとしたら、警戒の対象は言うまでもなくカメラ目線の先にいるヒトでしょう。

本種は繁殖に入ると、巣穴で抱卵中の番相手や卵、ヒナを残して逃避することはほとんどありません。そのため、樹上からヒトの行動を注視することが最大限の警戒行動なのです。なお、本種は県レッドデータブックで繁殖期の絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。伐採等による営巣木の減少に加え、撮影等を目的とした巣への接近といった人的攪乱により繁殖への影響が懸念されたためです。

「怖い」カメラマン

以前に、地学担当の学芸員が山北町の河川敷を、観察会の下見のために

歩いていた時のこと。突然、茂みから出てきたヒトに、「野鳥の撮影の邪魔になるからどいてほしい」と怒鳴られた、どうすればよいのか、と相談を受けました。河川敷は公有地ですし、そこでの行動を咎めることはできないはずですので、気にしないほうがいいですよと伝えました。しかし、同様の事例はウェブ上でも多数見られ、近所の公園を散歩していたら野鳥の撮影の邪魔だときつい口調で言われた、といったブログも見られました。確かに撮影の邪魔をされたら良い気分はしないと思いますが、怒鳴りつけるのは行き過ぎた行為ではないでしょうか。私自身はこのような状況に遭ったことがないのですが、公園などの遊歩道で突然ヒトが現れて邪魔だと言われたら、驚いたり「怖い」思いをしりますし、その場所に二度と行きたくなるかもしれません。ウェブで検索をした人は、このような体験をされたのでしょうか。

考えてみよう！野鳥との付き合い

これまでに遭遇したネガティブな体験を紹介しましたが、カメラマンが全て悪いわけではありません。マナーを守って、野鳥との距離を配慮しながら撮影している方も、私の周りに多くいます。一方で、バードウォッチャーの中にも、観察をしたいがために野鳥の生息地に侵入するヒトもいます。私有地に入り込み、居住者とトラブルになった事例もあります。しかし、私自身も含めどのヒトも野鳥を身近に感じたい、かわいい姿を楽しみたいとの思いから撮影や観察を始めたはずで、自分たちの何気ない行為によって野鳥がいなくなったり、あるいは観察ポイントが使えなくなったりする可能性があることを念頭に、野鳥との付き合い方と周りへの配慮を考えてほしいと思います。

引用文献

- 加藤ゆき・秋山幸也・重永明生, 2017. 神奈川県相模原市におけるナベヅルの越冬記録. *Binos*, (24): 47-50.
長野義春・大迫義人・西田智・溝口文男, 1992. 人や自動車の接近に対するナベヅルとマナヅルの反応. *Strix*, 11: 179-187.

※写真はすべて神奈川県内で撮影しました。